

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380152

研究課題名(和文) 儒学政治思想の持続と変容：朝鮮半島の国際政治認識を中心に

研究課題名(英文) Continuance and Transformation of Confucian Political Thoughts: The Case of Thoughts on International Relations in Korean Peninsular

研究代表者

姜 東局 (KANG, Dongkook)

名古屋大学・法学(政治学)研究科(研究院)・教授

研究者番号：80402387

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：東アジアと西洋近代の政治思想における共通基盤を探るという問題関心から、朝鮮の国際政治思想を中心に研究を行った。第一に、1910年の国際政治思想については、儒学と西洋思想の間の複雑な関係性・衝突だけでなく融合なども存在していたことを明らかにした。次に、3.1万歳運動における儒学の影響については、安東地域を中心とする研究の結果、儒学思想にウィルソン主義に共鳴する道徳的な要素があったことが、儒学者がこの激しい政治運動に参入した思想的原因であることを明らかにした。最後に、権五ソル(1897-1930)の事例などから、1920年代には儒学的な思考方法による社会主義への接近があったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I conducted a research on the understanding on international relations in Korea, pursuing the common ground in the political thought of the East Asia and the West. In this project, firstly, it was confirmed that there were various ways of relationship between Confucianism and Western thought, such as not only collision but also hybridization in 1910s. Secondly, through the research on the case of 3.1 movement in Andong, the common characteristics between Confucianism and Wilsonism became the ideological background of the Confucian intellectuals' active participation in the political movement. Finally, through the case of KOWN O-Seol(1897-1930) from Andong, it was found that the thought pattern of Confucianism made some Confucian intellectuals approach Socialism in 1920s.

研究分野：アジア政治思想史

キーワード：儒学政治思想 朝鮮半島 伝統と近代

1. 研究開始当初の背景

朝鮮半島の国際関係認識において、伝統 - とりわけ、儒学 - の影響はいつまで続いていたのか。通説による答えは、1910 年の日韓合併までであろう。「1905 年から 1909 年まで活発に続いていた義兵運動は、儒学による国際関係認識に基づいた最後の大規模な政治運動であったが、1910 年の日韓合併によってその失敗が明らかになった。そして、1910 年の暗黒期の際に、共和主義や社会主義などの西洋の政治思想について認識が深まるにつれて、伝統的な国際関係認識は衰退いった。そして、1919 年の 3.1 万歳運動の民族代表に儒学者がいないことで見えるように、西洋や日本の影響を受けた近代的知識人が、第一次世界大戦後の理想主義 - とりわけ、ウイルソン (W. Wilson) の民族自決主義 - を受け入れることで、国際関係論の領域における伝統と近代との交代が完成したということである。以上が通説の大筋であろう。

ただし、3.1 万歳運動に関する研究で、儒学の役割が再発見されたことは、このような通説に対する根本的な疑問を投げている。最近の政治史分野では、3.1 万歳運動の海外やソウルからの開始ではなく、地方での展開に注目する立場が台頭してきた。この立場からの研究では、全国で 200 万人以上が参加するに至った運動の拡散過程を解明するため、地方における運動の展開に関する実証研究を重ねてきた。その中で、地方、とりわけ、慶尚道地域における運動の拡散と激化において、儒学知識人の果たした決定的な役割が明確にされたのである (李廷銀『3.1 独立運動の地方示威に関する研究 (ハンゲル)』、2009 年など)。その結果、1919 年においても、儒学の政治的影響を否定することはできないことが明らかになった。

すると解決すべき政治思想史的な課題は、儒学の重要性を前提に、彼らの儒学思想の性格を明らかにすることへ移る。この問いに対して、運動への参加を儒学的な忠君愛民の表れとして説明することも考えられる。確かに、この伝統の温存部分は存在した。ただし、これだけでは説明がつかない近代的な側面が現われていたことは見逃せない。たとえば、慶尚道の安東、盈徳などでは、儒学知識人とキリスト教指導者が協力して、万歳運動を展開していた。18 世紀から続いていた朝鮮半島における儒学とキリスト教の熾烈な対立からすると驚くべき現象であろう。キリスト教が 3.1 万歳運動の民族代表の一角を担当して、ウイルソン等の理想主義国際関係論を積極的に受け入れた勢力であることからすれば、これらの協力は、少なくとも儒学の近代的な国際関係論の容認に基づいている。もしかすると、儒学と近代の国際関係認識との融合のような現象があったかもしれない。

ところが、これまでの研究において、儒学と近代の協力という事実について両方の思

想のつながりから説明する試みはなかった。この空白をもたらした重要な理由は、おそらく儒学と近代の熾烈な対立の歴史からして、両方の間に思想的共鳴が考えられなかったことにある。ところが、研究代表者は、1860 年代から 1910 年までの時期を対象とする最近の研究において、この共鳴の端緒ともいえる現象を発掘した。「朝鮮における西洋近代国際秩序の理解と春秋・戦国」(吉田忠編『19 世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究』京都：国際高等研究所、2010 年に所収)において、申請者は、「戦国」と「春秋」という儒学者の国際秩序理解の重要概念の変遷をたどりながら、近代朝鮮半島における儒学的国際秩序理解の断絶・持続・変容の歴史を明らかにした。この過程で、当時の西洋の国際関係の理解のために頻繁に使われた「戦国」は、西洋への理解の深化によってその役割を終えて、概念としての力を失ったこと、そして、「春秋」は「戦国」と対照的に、日露戦争以降、「春秋の義」という形で、近代的な国際秩序を理解しながら、それに対して儒教及び普遍の立場から批判する原理として読み直されることで、生命力を維持していたことがわかった。つまり、「春秋」は、「西洋近代国際秩序を現実として受け入れた点では、近代における変化を見せていたが、いかなる国際秩序においても、道徳的な側面の存在を追求する点では、伝統との強い連続を見せながら、日韓併合期においても、健在したのである。「春秋」で象徴される伝統的国際秩序認識が 1910 年代にも存続していたとすれば、第一次世界大戦後の理想主義と共鳴することは、自然なことに見える。すなわち、「春秋」と共鳴する国際秩序認識が西洋から現われたこととして受け入れられた可能性、そしてさらなる展開を見せた可能性は研究の対象となってくる。

本研究は、国家が死滅する激動の中で、国際関係における道徳的規範の存在への信念を貫いた朝鮮半島の儒学が、西洋発の国際関係論と出会った際に現われた二つ国際関係論の複雑な関係を明らかにし、多様なレベルでその意味を探ることで、儒学と西洋近代の政治思想の共鳴という側面を明確にする必要性を背景にして始まった。

2. 研究の目的

(1) 1910 年から 1919 年の朝鮮半島における国際秩序認識の歴史を明らかにする。とりわけ、嶺南地域の儒教知識人や庶民における伝統の残存、伝統と近代の融合の実像を明らかにする。

(2) 3.1 万歳運動期の地方における理想主義の国際秩序観の受入の過程を分析する。とりわけ、「春秋」で代表される儒学的国際秩序観と理想主義の国際秩序観の思想的共鳴が果たした役割に注目する。

(3)3.1 万歳運動後の変遷をたどる。とりわけ、運動の失敗が儒教的国際秩序認識に与えた思想的影響を明確にする。すなわち、儒教と理想主義の国際秩序認識を融合した思想に基づいた運動の失敗によって、儒教的国際秩序認識は終焉したのか、それともまた変容したのか。そして、これらの理解から、1920年代の社会主義の受入と伝統との関係を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、儒学と西洋近代の政治思想の構造的特徴を把握し、比較することで、隠れている構造的共通性の存在とその歴史的な役割を明確にする「歴史 - 比較 (historico-comparative)」的なアプローチを試みた。

このような方法論を使った研究を成功させるためには、何よりも資料の調査や発掘が重要なことになる。そこで、研究代表者は、韓国、日本、中国で10回以上の資料調査を行った。また、その中でも、もっとも資料が豊富に残っている韓国では、主な研究地域である慶尚道での個人資料の発掘なども積極的に行って、実証に基づいた手堅い論証の基礎を固めた。

4. 研究成果

3年間の研究から、まず1910年における国際政治をめぐる思想の展開については、地方の書堂 - 伝統的な私設教育機関 - 等において、大韓帝国期に出版された漢籍などを利用しながら、儒学とともに近代的な国際秩序に関する教育が行われたこと、地方の儒学者の間にも、キリスト教や社会主義などの潮流が波及されることで、儒学とこれらの西洋の思想の間の複雑な関係性 - 衝突はもちろん、融合なども - が現れたことが明らかになった。

次に、1919年の3.1万歳運動における儒学的国際秩序観の影響については、朝鮮半島の地方の儒学を代表する安東を中心とする研究の結果、儒学者は国際関係において「道」で表現される規範性が存在している信念を持っていたが、3.1万歳運動の思想的原因になっていたウィルソン主義 (Wilsonism) にこの信念が共有されていたことが、安東地域のような儒学が強かった地域で儒学者も参加する激しい運動が広がった重要な原因であることを明らかにした。

最後に儒学的国際秩序観の表面的な消滅過程とそれが残した遺産に関しては、安東の両班出身でありながら、第2次朝鮮共産党の共青責任秘書を務めるなど、社会主義運動の指導者になった権五高 (1897 - 1930) の事例などから、国際関係を含めた全体的な思想の変容過程において、儒学的な思考方法、とり

わけ、理という原理の追求によって、高い抽象度を議論までを備えた総合的思想体系へのこだわりが生じたこと、そして、このこだわりによって西洋近代の社会科学の中で、総合的理論体系の代表格であった社会主義への接近が現れたことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

姜東局「近代朝鮮半島における政治空間に対する認識の変容：家・郷・国・天下から国内・国際へ」韓国における国際政治学と概念史：媒介項「文明」の方法論的再構築(韓国語)、『名古屋大学法政論集』、査読無、第267号(予定)、2016年。

姜東局「韓国における国際政治学と概念史：媒介項「文明」の方法論的再構築(韓国語)、『概念と疎通』、査読有、第13号、2014年、35-86頁。

[学会発表](計2件)

姜東局「近代朝鮮における「交隣」概念」、朝鮮史研究会、第52回全大会、2015年10月18日、於：学習院大学。

姜東局「朝鮮時代の国際政治思想と当代朝鮮半島：1876～1910年における変容とその思想的遺産を中心に」(韓国語)国立外交院第4回外交史ブラウンバックセミナー招待講演、2015年9月4日、於：国立外交院(韓国ソウル市)。

[図書](計1件)

KANG Dongkook "Toward a Trans-Civilizational Perspective on Good Democracy: A critique of Maruyama masao's Understanding of Confucianism and Democracy" Insub Mah and Heek Lee eds. The search for good democracy in Asia : essays on politics and governance. New Delhi, India : Manak Publications Pvt. Ltd, 2015, pp. 195-213.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

姜 東局 (KANG, Dongkook)
名古屋大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：80402387

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：